コレクションラボ 009

リビングルーム

Collection Lab 009: Living-room

2024年11月2日[土]～2025年2月24日[月]

開館時間｜ 10：00 ～ 19：00（12 月 28 日、1 月 2 日、1 月 3 日は 10：00 ～ 17：00）
休館日｜火曜日（2 月 11 日、2 月 18 日は開館）、12 月 29 日～ 1 月 1 日、2 月 5 日、2 月 12 日　観覧料｜無料　主催｜八戸市美術館
担当学芸員｜篠原英里　会場構成｜佐藤慎也※ 12 月 24 日の休館日に模様替えを行い、一部展示作品が変わります。

ごあいさつ

コレクションラボでは、コレクション（収蔵作品）のラボ（研究室）として、作品の魅力を探り、切り口や見せ方を工夫した小展示を行っています。そして、ここでの成果を、より大規模な展覧会や作家・作品研究の進展などに活かしています。
9回目となる本展では、展示空間と鑑賞体験の関係性を探っています。美術館の展示室というと、一般的には崇高で静謐で、非日常的な空間というイメージがあるでしょう。しかし、ここでは、「リビングルーム」と題しているように、そうしたイメージとは異なる、日常的な感覚を伴う展示空間を設えています。そうすることで、いつもの自分で作品に向き合い、作品との心理的距離や感じる印象が変化するのではないかと考えています。
リビングルームは、住人が過ごし、くつろいだり、団らんしたりする部屋です。ご自宅のリビングルームにいる時のように、リラックスして作品鑑賞をお楽しみください。

第 1 室　テーブルを囲む

第 1 室には、部屋の中央にテーブルとチェアがあり、その周りを取り囲むように絵画作品が展示されています。ここで展示しているのは、花や果物の静物、食卓の風景など、テーブルが描かれている作品です。作品に近づいてじっくり見るのもよいですし、少し離れてテーブル越しに見るのもよいでしょう。チェアに腰掛けて、テーブルに少し肘でもついて、ぼうっと作品を眺めるのもおすすめです。
No.8《魚のあるテーブル》を描いた月舘れいは、他にもテーブルを描いた作品を多数残しています。月舘は、毎日接しているテーブルを眺めていると、イメージが湧いてきたそうです。あなたがテーブルを見て思い浮かべるのは、どんなイメージでしょうか。

No.	作品名	作家	制作年	技法、材質	
1	葡萄と	大久保景造	1991	キャンバス、油彩	
2	花	加賀利孝	不詳	キャンバス、油彩	
3	百合	月舘れい	不詳	キャンバス、油彩	
4	壷II	渡辺貞一	1969	キャンバス、油彩	
5	卓上	名久井由蔵	1959	板、油彩	
6	静物	名久井由蔵	1965	板、油彩	
7	青衣の食卓	渡辺貞一	1968	キャンバス、油彩	
8	魚のあるテーブル	月舘れい	2002	キャンバス、油彩	
9	西瓜	月舘れい	不詳	紙、水彩	＊
10	鳥と西瓜	月舘れい	1980	紙、水彩	＊＊

＊模様替え前（12/23 まで）のみ展示
＊＊模様替え後（12/25 から）のみ展示

第 2 室　ソファでくつろぐ

第 2 室には、大きめのソファがあります。ここで展示しているのは、ソファに座ってゆっくり鑑賞するのにぴったりな作品です。特にソファの目の前には、比較的大きな作品を展示しています。普段、ソファに座る時は、テレビや窓の外を見たり、誰かとおしゃべりしたりしているでしょうか。今はその時と同じような心持ちで、作品を眺めながらおくつろぎください。
模様替え前には風景画を、模様替え後には幻想的な雰囲気の作品を主に展示します。あれこれ作品のことを考えてもよいですし、何にも考えずに座って休憩するのもよいでしょう。作品とは関係のない今日の晩ご飯や、将来のことを考えてもよいでしょう。好きなように自分らしくお過ごしください。

No.	作品名	作家	制作年	技法、材質	
11	胡蝶夢	工藤甲人	不詳	紙本、着色	＊
12	海辺夢	工藤甲人	1988	紙本、着色	＊＊
13	馬（韻）	久保田政子	不詳	キャンバス、油彩	
14	野仏	渡辺貞一	1979	キャンバス、油彩	
15	友と咲かせた花々	岩沢喜作	1979	紙、木版	＊
16	雪の降る街	北岡文雄	1966	紙、木版、多色刷	＊
17	芙蓉図	杉山光鳳	不詳	紙本、着色	＊＊
18	北の浜（大畑）	葛西四雄	1977	キャンバス、油彩	
19	宮古湾風景	石橋宏一郎	1982	キャンバス、油彩	
20	行是行	宇山博明	不詳	紙、墨	＊
21	不可忘	宇山博明	不詳	紙、墨	＊＊
22	蒼い夏	下村正二	1994	キャンバス、油彩	＊
23	父の深い眠り	豊島弘尚	1987	キャンバス、油彩	＊＊
24	浜の子ども	福勢喜一	不詳	キャンバス、油彩	＊＊

＊模様替え前（12/23 まで）のみ展示
＊＊模様替え後（12/25 から）のみ展示

ガイド

- 気になる作品があれば、作品近くに掲示している No. を確認し、この作品リストで作家や作品名、技法などをご覧ください。
- 作家のことをもっと知りたい場合は、この裏面にある展示作家紹介をご覧ください。
- 12 月 24 日に模様替えを行います。その前後で一部の展示作品が入れ替わるほか、展示位置や家具の配置も変わります。
- 展示作品の写真撮影と写真の個人利用（SNS やブログでの投稿を含む）は可能です。各著作権者の承諾を得ています。ただし、動画撮影およびフラッシュ・三脚を使用しての撮影はご遠慮ください。
- 展示環境を清浄に保ち、作品を長期的に保存するために、展示室内では飲食を禁止しています。また、作品と壁にはお手を触れないようにお願いいたします。
- 本展覧会について、ご感想・ご意見がありましたら、展示室内の案内員へお伝えください。

八戸市美術館
Hachinohe Art Museum

展示作家紹介

大久保景造（1936 - 2006）OKUBO Keizo

作品 No. 1

八戸市出身。武蔵野美術学校（現武蔵野美術大学）に合格するも、家族の健康上の都合で断念。画家・岡山良一の影響で抽象画を描き始める。1958 年、第 8 回モダンアート協会展に初出品・初入選し、以後 3 年連続入選。1961 年、福勢喜一と同じく創造美術展に入選。その後、作風が具象に変わり、静けさのある風景画や静物画を繊細なタッチで描いた。八戸市の丸光デパート、小野画廊などで個展を開催。ジャズ喫茶を経営し、編集者、作詞家など多方面で活躍した。

月舘れい（1921 - 2015）TSUKIDATE Rei

作品 No. 3, 8, 9（模様替え前）, 10（模様替え後）

八戸市出身。八戸市で画家・西村健次郎の指導を受け、女子美術専門学校（現女子美術大学）へ進学。1948 年、青森県七戸町出身の画家・鷹山宇一の勧めで出展した第 33 回二科展で、初出展・初入選を果たす。以降、毎年出展し、1964 年に二科会会員に推挙され、1988 年二科会の理事、1995 年常務理事、2006 年名誉理事に就任。東京都西東京市にアトリエを構え、テーブルと静物や人物、風景を組み合わせた油彩画をよく描いた。

名久井由蔵（1917 - 1979）NAKUI Yoshizo

作品 No. 5, 6

八戸市出身。同い年の渡辺貞一と同じく、青森美術研究所で学ぶ。1940 年、第 10 回東奥美術展入選。1941 年、第 16 回国展に渡辺とともに初入選し、以降毎年出展。1963 年には会友に推挙された。生涯八戸市で制作を続け、1953 年に芸術家5人（石橋一貫、樋口猛彦、袴田恒男、沢内哲、名久井）で五玄会を結成し、1968 年にはグループ脈に入会するなど、県内の交友・展示に積極的だった。キャンバスではなく板に、鋭さのあるタッチで描いた。

久保田政子（1934-　）KUBOTA Masako

作品 No. 13

八戸市出身、東京都在住。鮫町の坂道を鞭で叩かれながら登る荷馬車の馬や、兵隊と戦争へ行く馬の姿が、馬の画家・久保田の原体験となった。絵描きになりたい一心で上京。1956 年、自由美術展に初出展し初入選。1957 年、女流画家協会展プールブー賞受賞。1958 年、女流画家協会会員となる。2006 年、青森県文化賞受賞。約 50 年前に馬を1万頭描くと誓い、自由に駆ける馬を描く。故郷の櫛引八幡宮や蕪島神社には、自ら描いた絵馬を奉納した。

加賀利孝（1941 - 2019）KAGA Toshitaka

作品 No. 2

旧満州出身。6 歳で引き揚げ、青森県五戸町で育ち、武蔵野美術学校に進学。八戸市立第二中学校に勤めた後、1968 年に教職を辞して絵に専念。銀座のサエグサ画廊や八戸市の丸光デパートなどで個展を開く。1985 年、88 年には上野の森絵画大賞展に入選。1986 年、87 年に盛岡芸術祭洋画部門市長賞、2004 年に会長賞を受賞。盛岡市にアトリエを構えた。静物・風景・人物など様々なモチーフを、ざらりとした質感と巧みに際立たせた色彩で描いた。

渡辺貞一（1917 - 1981）WATANABE Teiichi

作品 No. 4, 7, 14

青森市出身。木造町（現つがる市木造）出身の画家・松木満史が開設した青森美術研究所で学ぶ。各地で個展を開催し、特に北海道を気に入っていた。戦後は東京都練馬区にアトリエを構え、国画会が運営する公募展の国展に出展し活躍した。1941 年に第 16 回国展に初入選し、1958 年に会員に推挙された。東北・北海道の遺跡や風習に着想を得た心象風景が代表作だが、本展示作品のように壺や花、人物を描いた小作品にも渡辺らしい深い色使いが表れている。

工藤甲人（1915 - 2011）KUDO Kojin

作品 No. 11（模様替え前）, 12（模様替え後）

弘前市出身。1934 年に上京し、川端画学校で日本画を学ぶ。出征を経て終戦後に帰郷し、再び制作に励んだ。1951 年に第 15 回新制作展で新作家賞を受賞し、後に新制作協会会員となる。1962 年に平塚市へ移住。1974 年、創画会結成に参加。1978 年～ 83 年に東京藝術大学で教授を務める。2007 年には青森県立美術館で「工藤甲人展 - 夢と覚醒のはざまに -」が開催された。津軽地方の冬と、春を迎える喜びを原点とし、独自の作風を築き上げた。

岩沢喜作（1930 - 2003）IWASAWA Kisaku

作品 No. 15（模様替え前）

八戸市出身。父の転勤で転校した旧制青森県立田名部中学校（現県立田名部高等学校）の恩師・級友に墨絵を評価され、後の制作が方向付けられたという。武蔵野美術学校卒業。「国際展でも墨一本で頑張れ」という棟方志功の言葉を励みに制作した。1986 年の国際芸術展国際美術大賞フランス展奨励賞をはじめ、1991 年の英国国際親善美術展第1位など、国際展で高い評価を受けた。彫りと刷りによる鋭さとグラデーションが、絶妙な味わいを生み出している。

北岡文雄（1918 - 2007）KITAOKA Fumio

作品 No. 16（模様替え前）

東京都出身。東京美術学校（現東京藝術大学）油画科に進学し、版画家・平塚運一から木版画を学んだ。1945 年に旧満州に移り、中国木刻（木版画）に出会う。帰国後は春陽会展に版画を出展した。1964 年からアメリカで木版画を指導し、1966 年には個展を開催。展示作品はこの頃の作で、アメリカの冬景色だと思われる。1988 年に町田市立国際版画美術館で個展を開催。1997 年、勲四等旭日小綬章を受章。明瞭な色彩による風景の木版画を制作した。

葛西四雄（1925 - 1990）KASAI Yotsuo

作品 No. 18

南津軽郡金田村（現平川市）出身。1951 年に結核のため青森師範学校本科を中退し、療養生活を送る。この時に見た陸奥湾の風景が、後の漁村を描いた作品に繋がった。小学校教員を務めた後、画業に専念するために上京。弘前市出身の画家・奈良岡正夫に師事した。示現会では、1963 年に会員に推挙され、1984 年に理事に就任。日展では 1985 年に会員に推挙された。東京都世田谷区にアトリエを構え、青森の漁村の風景を描き、赤を重要な色として用いた。

宇山博明（1913 - 1997）UYAMA Hiroaki

作品 No. 20（模様替え前）, 21（模様替え後）

青森市出身。終戦後に復員し、妻の疎開先・八戸市種差に居を構える。杉山光鳳と同じく八戸市で 1947 年に設立された「春光会」の設立メンバー。同会の八戸綜合芸術展第 1 回には、月舘れい、名久井由蔵、福勢喜一らが参加した。書家・大澤雅休による書道芸術院結成に参加。1950 年には第 3 回書道芸術院展で総理大臣賞を受賞。書道芸術院理事、審査員を務める。自らを造形家と称し、大胆な書だけでなく、油彩や染織、凧絵なども手がけた。

豊島弘尚（1933 - 2013）TOYOSHIMA Hironao

作品 No. 23（模様替え後）

上北郡横浜村（現横浜町）に生まれ、小学生の時に八戸市へ引っ越す。西村健次郎に学び、舞踊家の姉・和子がいた東京へ移る。東京藝術大学卒業後、個展を精力的に開催。1974 年、第 8 回文化庁在外芸術家派遣に選出され、北米・北欧に滞在。1998 年に第 21 回安田火災東郷青児美術館大賞を受賞。1960 年代までは人間の頭部をテーマに制作し、後に八戸や北欧、那須、家族などが表れる。モチーフに複数の意味を持たせ、独自の世界観を表現した。

杉山光鳳（1903 - 1983）SUGIYAMA Koho

作品 No. 17（模様替え後）

宮城県出身。東京美術学校本科卒業。一時、横山大観に師事。1941 年～ 62 年、妻の実家の八戸市に住む。八戸市の文化芸術家らの交流を目的に 1947 年に設立された「春光会」の設立メンバー。春光会会長で日本画家の七尾英鳳、鯉を得意とした柏木貫邦とともに、「八戸の三ぽう」と呼ばれた。1953 年、54 年、56 年の河北美術展に入選。1957 年には八戸市丸美屋デパートで石橋宏一郎と二人展を開催。創造美術展の日本画の部で審査員を務めた。

石橋宏一郎（1911 - 1993）ISHIBASHI Koichiro

作品 No. 19

八戸市出身。1940 年、上京して川端画学校に入学。画家・松本竣介に勧められ、1943 年、二科展に入選。1944 年に出征し、終戦後に八戸市へ帰郷。塗料店を始める。画材を仕入れて市内の画家に販売していた。二科展が 1946 年に再開すると、毎年出展。1953 年に会友、1960 年に会員に推挙された。石橋の活躍は、同郷の後輩・月舘れいの背中を押した。石橋は、自らが生まれ育った“風土”をテーマに、力強いタッチで作品を描き続けた。

下村正二（1955 -　）SHIMOMURA Shoji

作品 No. 22（模様替え前）

八戸市出身、在住。高校生の頃に油彩画を描き始め、卒業後は八戸・東京で職を変えながら制作を続けた。1980 年の八戸丸光デパートでの個展を機に絵描きになると決心し、上京。1985 年には日伯現代美術展に入選し、銀座昭和画廊で個展を開催、八戸市へ帰郷した。1992 年に第 2 回八戸市美術報奨を受賞。個展を中心に活動を続け、2024 年 12 月 5 日～ 9 日には八戸市美術館で個展を開催。独学で獲得した写実的な描法で静物画や風景画を描く。

福勢喜一（1905 - 1996）FUKUSE Kiichi

作品 No. 24（模様替え後）

二戸市出身。1927 年に八戸市の画家・福田寛、西村健次郎と結成した絵画団体「躍陽社」は、戦前の八戸美術界を牽引した。また、「牧羊会」の主宰として水彩画展を開催。スピードスケート選手でもあり、1930 年には全日本スピードスケート選手権大会に出場した。戦後は中学校教師を務める。1956 年、第 1 回スポーツ芸術展入選。1955 年から 3 年連続河北美術展で入選。1960 年代に創造美術展に 3 度入選。奥入瀬渓流をはじめ、身近な風景をよく描いた。